

綾宿り

岩見沢市における心理デトックスを促すホスピス併設型病院及び周辺施設の提案

●池上帆乃香／札幌市立大学（指導教員：齊藤雅也）

Ikegami Honoka / Sapporo City University

1. 概要

療養施設で患者が一日の大半を過ごす病室は、各患者の病状差や温熱環境に対する感覚が個人で異なるため、自分好みの環境への調整は難しい。患者を取り巻く環境の好みの違いが療養生活でのストレスになっていると考えられる。

先行研究には、病院内で温湿度の秋・冬季実測例¹⁾などがあるが、これらは患者がストレスを感じない物理環境条件の要因の調査に留まり、空間の提案にまで言及されていない。

本研究では、病室における快・不快の環境要因をアンケートとヒアリング調査で明らかにし、結果に基づき、岩見沢の敷地を対象にホスピス併設型の病院及び周辺施設の計画を行った。

アンケート結果によると、一般人・医療従事者ともに、病院のイメージは全体的に「明るい」や「辛い」が多いことがわかった（図1）。その中でも、一般的に「明るい」は良い印象を表すが、文脈の前後関係の分析で病院の白壁からくるネガティブなイメージが主な回答と予想された。また、患者へのヒアリング調査から、自らの操作で環境調節をすることが快に繋がると予想されたほか、療養生活中の快・不快の要素で最も多く挙げられたのは「空気の流れ」であった（図2）。

以上の結果を活かし、岩見沢市立総合病院の移設後を想定して、附属機関の内科・小児科・産婦人科を持つ病院とホスピス・託児所・調剤薬局・コンビニエンスストア・カフェ併設ベーカリーを計画した。小児科と託児所を併設することで出産後の外来利用による子育て世代の住みやすさ向上を促進した。ホスピスは普段の生活圏に近い環境に置いて、住宅に近い生活感の中で体調に向き合うことをコンセプトとした。

2. 設計計画

全体のコンセプトは「巧みに操る安住の仮住まい」である。自身の住宅と同様に、仮住まいの空間で自分の思い通りに住まうという意味を込めた。

病院の特徴として、各病室の間に休憩や読書に利用できる換気・採光部屋を配し、各患者の枕元にその部屋に面した窓を設けた。天井と床を板張りにし圧迫感を抑え、自らの換気・採光調節によって充足感が得られると考える。病室部分は平屋で寸法を住宅に近くし、換気・採光部屋の外壁全面のガラス張りで切妻や片流れの家が立ち並ぶ光景を表現した。ホスピスは入れ子形状で、中心部に水場やスタッフルームなどを設け、各寸法を住宅の寸法に近づけた。それに対し、コアの外は土間や薪ストーブがあるリビングや天井の吹き抜けで開

放的な空間にした。外部からコアの空間にかけてプライベートの度合いが増すように計画した。託児所は、スタッフルームから園庭まで一望できる大きさの窓を各部屋の壁面の低い位置に配置し、子どもでも部屋が見渡せるよう設計した。カフェ併設ベーカリーはカフェの床に段差を作り、パンの購入者とカフェ利用者の目線が合わない設計をした。コンビニエンスストアと調剤薬局は1つの屋根がかりで、建物間を通り広場に抜けられる。

植栽は、北側の川縁にソメイヨシノが植えてあるため、開花時期をずらしたカスミザクラを植え、ハルニレとシンボルツリーのカツラで水辺の植栽を施して川に繋がる計画をした。また、カツラを人通りの多い場所に植え、葉を踏ませて甘い香りが香る配置とした。

施設の経年計画は、託児所と保健センターの相互提携により、育児環境や託児環境の充実が挙げられると考える。



図1 「病院のイメージ」に対する回答の割合 (N=69人, 135票)

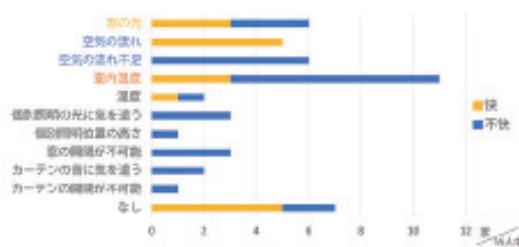


図2 快・不快の条件 (2019/8/10 ~ 9/11)



図3 全体イメージパース

註・参考文献

* 1 高儀郁美, 津野柚衣ら: 療養環境における入院患者の快・不快感に関する研究 その2. 病床照度と患者の明るさ感・快適感, 日本建築学会北海道支部研究報告集 No.91, 2018.6.